

ウクライナ考と大国の論理(番外編として)

ウクライナを知るための一助となればと思い、2014年3月に産地情報の中でふれたウクライナに関する文章を再録させていただきます。

=QT

2008年8月、北京五輪開幕時にグルジアが南オセチアに侵攻した。平和の祭典の折はロシアも身動きが取れないと踏んでのことだった。南オセチアはグルジアにある自治共和国で、ロシア人が多く住んでいる。グルジアの侵攻に対しロシアは自国民の安全を守るとし、当時の親欧米政権に反攻した。何やらよく似た事件がウクライナで起こった。オリンピック、自治共和国……。共通項を見出すことができる。

旧ソ連邦構成国の反口組織 GUAM (グルジア、ウクライナ、アゼルバイジャン、モルドヴァ) は、ソ連邦崩壊後紆余曲折はあったものの概ね反口・親欧米路線を敷いてきた。この GUAM の動きは、アメリカで起こった同時多発テロを機に路線変更を余儀なくされる。米口の利害が一致したことが影響している。対イスラム過激派対策だ。国内にチェチェンを抱えるロシアにとって、アメリカと歩調を合わせる方にメリットを見出した。

それから数年経過し、グルジアでバラ革命、ウクライナでオレンジ革命が起こり、親欧米政権が誕生した(ロシアはこれらの革命は欧米諸国がそそのかしたと言いつ張っている)。とりわけウクライナは軍事同盟である NATO への加盟を企図したが、これに対しプーチンは公然と恫喝するような声明を出した。「ウクライナが NATO に加盟するなら、ロシア人が多く居住する東ウクライナ、クリミア半島を併合するために戦争を仕掛ける」と。

さらに時は過ぎ、先述したグルジアの拙速、ウクライナ政権内の仲間割れによって、親欧米政権が倒れ、親口政権が両国に生まれたが、それはあくまでも政治の世界の皮相的な部分だけで、市民たちのロシアに対する感情や意識は全く変わっていない。

ウクライナ共和国内にあるクリミア自治共和国をロシアは主権国家として承認し、ロシアに編入した。このロシアのクリミアへの拘りを理解するには歴史を見る必要がある。ざっと駆け足で書けば、ウクライナ地方は13世紀にモンゴル軍に制圧されてキプチャク・ハン国の版図になり、これが分裂した後もクリミア・ハン国は18世紀にロシアがクリミアを併合するまでオスマン・トルコ帝国の属国として存続した。それ以来クリミアはロシア領だったが、1953年にスターリンが死亡したのち第1書記に就任したフルシチョフは、ウクライナにゆかりが深かったこともあって、翌年クリミア半島をロシアからウクライナに移管した。ソ連邦の構成国として共存している間は何ら問題とならなかった。だがソ連邦崩壊後は、黒海艦隊の本拠地でロシアの重要軍事施設がウクライナ領内に残されることになる。ロシア海軍の駐留が認められる協定が締結されるには、それから20年近く待たねばならなかった。

そんな歴史があるのだが、これら史観はすべて大国の論理からもたらされたものであって、元々これらの土地に住んでいる(いた)人たちにとってはありがたい迷惑な話である。タタール人が迫害を受けている(ただ彼ら自身も侵略者でスラブ民族を支配した。『タタールのくびき』である)。民族間で軋轢が生まれている。世界中にネオ・ナチ的な民族主義がはびこっている。アンネの日記の関連書籍が破られた出来事は象徴的だ。クリミアを含むウクライナにはいくつかの民族が仲良く共存してきた。ユーゴスラヴィアもそうだった。それがごく一部の人間の何らかの政治的な思惑か野心なのかあずかり知らないが、そんな「ちっぽけ」なものによって、大ごとを招いてしまう。同じ過ちを繰り返す愚かさ。

=UNQT

ロシアにとってウクライナは特別な国。他の国が何を言おうが、同じスラブ民族の問題なので、ほっといてくれということだろうか。それにしても大国はまた同じような過ちを繰り返している。